

沙石集『歌ゆゑに命を失ふ事』定期テスト対策問題 | 現代語訳・文法・内容の頻出設問と解答

組 番 氏名

/100点

本文

天徳の御歌合のとき、兼盛、忠見、ともに御隨身にて左右についてけり。初恋といふ題を給はりて〔①〕、忠見、名歌詠み出だしたりと思ひて、兼盛もいかでこれほどの歌詠むべき〔②〕とぞ思ひける〔③〕。

恋すてふ〔④〕わが名はまだき〔⑤〕立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか〔⑥〕

さて、すでに御前にて講じて〔⑦〕、判ぜられけるに、兼盛が歌に、

つつめども色に出でにけりわが恋はものや思ふと人の問ふまで

判者ども、名歌なりければ判じ煩ひて〔⑧〕、天気〔⑨〕を伺ひけるに、帝、忠見が歌をば両三度〔⑩〕御詠ありけり。兼盛が歌をば多反〔⑪〕御詠ありけると、天気左にあり〔⑫〕とて、兼盛勝ちにけり。

忠見、心憂く〔⑬〕おぼえて心ふさがりて、不食の病〔⑭〕つきてけり。頼みなき由〔⑮〕聞きて、兼盛、とぶらひければ〔⑯〕、「別の病にあらず。御歌合のとき、名歌詠み出だしておぼえ侍りしに、殿の『ものや思ふと人の問ふまで』に、あは〔⑰〕と思ひて、あさましくおぼえしより、胸ふさがりて、かく思ひ侍りぬ。」と、つひにみまかりにけり〔⑱〕。

執心こそ由なけれども〔⑲〕、道を執する習ひ、あはれにこそ〔⑳〕。ともに名歌にて『拾遺』に入りて侍るにや〔㉑〕。

※兼盛の歌の初句は、『沙石集』の伝本や教科書によって「つつめども」「忍ぶれど」の両形があります。『拾遺和歌集』・小倉百人一首では「忍ぶれど色に出でにけり…」の形で知られます。

設問

設問は全部で28問あります。型ごとにまとめてありますが、番号は通し番号です。問26～28は発展問題（縁語の演習）です。解答は記事末尾の「解答・解説を見る」で確認できます。

1. 現代語訳

- 傍線部②「いかでこれほどの歌詠むべき」を、「いかで」のはたらきがわかるように現代語訳しなさい。誰の心中の思いかも答えること。
- 忠見の歌「恋すてふわが名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか」を現代語訳しなさい。
- 兼盛の歌「つつめども色に出でにけりわが恋はものや思ふと人の問ふまで」を現代語訳しなさい。
- 傍線部⑮「頼みなき由」を現代語訳しなさい。

5. 傍線部⑨「執心こそ由なけれども」から「あはれにこそ」までの一文を現代語訳しなさい。

2. 語句

6. 傍線部⑤「まだき」の意味を答えなさい。

7. 傍線部⑦「講じて」とは、ここでは何をすることか答えなさい。

8. 傍線部⑨「天気」の本文中での意味を答えなさい（現代語の「天気」との違いがわかるように）。

9. 傍線部⑬「心憂く」の意味を答えなさい。

10. 傍線部⑭「不食の病」とはどのような病か答えなさい。

11. 傍線部⑯「とぶらひければ」の「とぶらふ」の意味を答えなさい。

3. 文法・敬語

12. 傍線部①「給はりて」の敬語の種類と、誰への敬意かを答えなさい。

13. 傍線部③「ぞ思ひける」を文法的に説明しなさい（「ける」の活用形にふれること）。

14. 傍線部④「てふ」を文法的に説明しなさい。

15. 傍線部⑥「こそ思ひそめしか」の「しか」を文法的に説明しなさい。

16. 傍線部⑱「みまかりにけり」を単語に分け、それぞれ文法的に説明しなさい。

17. 傍線部⑳「あはれにこそ」の下に省略されている語を補い、このような表現を何と呼ぶか答えなさい。

18. 傍線部㉑「入りて侍るにや」の「にや」を文法的に説明し、下に省略されている語を補いなさい。

4. 内容理解

19. 傍線部⑧「判じ煩ひて」とあるが、判者たちはなぜ判定に困ったのか、本文に即して答えなさい。

20. 傍線部⑩「両三度」と傍線部⑪「多反」の対比は、何を表すための描写か説明しなさい。

21. 傍線部⑫「天気左にあり」とはどういうことか。これによって勝敗がどう決まったかも答えなさい。

22. 傍線部⑰「あは」と思ったときの忠見の心理を説明しなさい。

23. 忠見が命を落とすに至った経緯を、題名「歌ゆゑに命を失ふ事」と関連づけて簡潔に説明しなさい。

5. 文学史

24. 「天徳の御歌合」は何天皇の時代に宮中で行われた歌合か。また「歌合」とはどのような催しか簡潔に説明しなさい。

25. (1)『沙石集』の成立時代・ジャンル・編者を答えなさい。(2)本文の二首はともに小倉百人一首に収められている。百人一首での兼盛の歌の初句を答えなさい。

6. 【発展】縁語の演習——「鼓の滝」の歌

歌への執心を描く話としてあわせて味わいたいのが、西行の説話として講談・落語「西行鼓ヶ滝」や能「鼓の滝」で伝えられる改作の逸話です（※『沙石集』の本文ではありません）。旅の歌人が摂津国の名所・鼓の滝で

歌を詠んで得意になっていたところ、宿を借りた老夫婦と娘に「伝へ聞く」→「音に聞く」、「来て見れば」→「打ち見れば」、「沢辺」→「川辺」と一句ずつ直され、

音に聞く鼓の滝を打ち見れば川辺に咲くや白百合の花

という歌に生まれ変わった、というものです（三人は和歌三神の化身だったと伝えられます。歌の形には伝承による異同があります）。

26. 直された後の歌から、「鼓」の縁語としてはたらいっている語を三つ抜き出しなさい。

27. 「来て見れば」を「打ち見れば」に直したことで、歌はどのように良くなったか。「縁語」の語を用いて説明しなさい。

28. 「沢辺」を「川辺」に直したのは、「かは」にあるものが掛けられているからである。何が掛けられているか答えなさい。